

様々な話題がナマス(類)を軸に展開され、ある種チャンブル(ごちやまぜ)な魅力を醸しだしている。さし絵には江戸時代の「鯰絵」も、とてもおきたい「頭蓋骨」も登場する。

それにしても、人間のなりわいにしっかり居座る水辺の住人「鯰」の実力には脱帽の思いである。(佐々木邦夫)

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
55(1): 58-59

新知見紹介

2001年-2006年に琵琶湖の堅田内湖で見られた 優占魚種の置き換わり

Replacement of dominant fish species from 2001 through 2006 in a satellite lake, Katata Naiko, of Lake Biwa

琵琶湖の沿岸帯に形成される内湖では、かつて豊かで多様な魚類相が形成されていた(琵琶湖生物資源調査団, 1966)。しかし現在では、ブルーギルやオオクチバスなどの北アメリカ産外来種が優占し、生物多様性の喪失が進行している(太田, 2005)。一般に、生態系の劣化には、外来魚の侵入と増加が深く関与しているといわれるが、国内においてブルーギルとオオクチバスの個体数増加に伴う生物相の変遷過程を、定量的に、かつ長期にわたって継続的に記録した例はほとんどない。著者らが琵琶湖の堅田内湖において5ヵ年(2001年-2006年)にわたって実施してきた定量採集調査の結果は、これら2種の生態系に及ぼす影響が急速かつ甚大であることを改めて示した(鈴木ほか, 2007; 中川・鈴木, 2007)。方法と結果の詳細は原著に譲り、ここではその概略を紹介する。

図1に各年度に得られた魚類の個体数組成を示す。2001調査年では、フナ属魚類、モツゴ、タイリクバラタナゴが優占種上位3種類であり、全採集個体数の83.3%を占めた。ブルーギルとオオクチバスの個体数の割合は少なく、あわせて3.9%にとどまった。2002調査年では、2001調査年と同様にフナ属魚類、タイリクバラタナゴ、モツゴが優占種上位3種類であり、全採集個体数の84.3%を占めた。ブルーギルとオオクチバスの個体数の割合は依然として少なく、それぞれ3.7%と0.7%であった。

ところが、2003年調査年には、北アメリカ産外来種2種がやや増加傾向を見せ、2004調査年には、優占種が既存の魚種から北アメリカ産外来種へと大きく入れ替わった。すなわち、2003調査年から2004調査年にかけて、それまで最優占種であった在来種であるフナ属魚類、モ

ツゴ、外来種タイリクバラタナゴの個体数の割合が、それぞれ52.0%→18.0%, 12.8%→0.0%, 4.1%→0.5%へと激減した。一方、ブルーギルとオオクチバスの個体数の割合は、2003調査年から2004調査年にかけて、それぞれ11.5%→59.6%, 4.7%→9.3%へと増加し、特に前者は著しい増加を示した。2005調査年には、これら外来種2種の個体数割合がさらに高い値を示した(図1)。

これら結果は、北アメリカ産外来種2種が急増することによって、内湖のような閉鎖性の高い小水域では、魚類相がきわめて短期間のうちに大きく置き換わることを示している。なお、2003年から2004年にかけて観察された北アメリカ産外来種2種の増加に伴って、フナ属魚類、タイリクバラタナゴおよびモツゴが減少した現象(図1)は、1996年から1997年の宮城県伊豆沼・内沼で見られたオオクチバスの増加に伴ってタナゴ類やモツゴなどの在来魚が激減した現象と酷似する(高橋, 2006)。さらに、本調査水域では北アメリカ産外来種2種の増加と同調的に、外来植物のボタンウキクサが急増したのが観察されているが(中川, 2005)、このような同調した現象は、大阪府淀川ワンド群で知られている事例(持

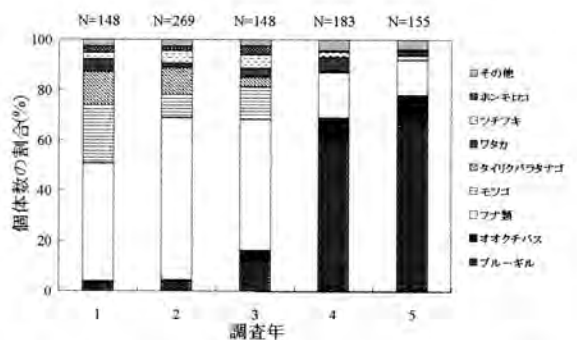


図1. 堅田内湖における調査年度別の魚類の個体数組成。1, 2001調査年(2001年8月-2002年8月, 112調査日); 2, 2002調査年(2002年9月-2003年7月, 22調査日); 3, 2003調査年(2003年11月-2004年7月, 15調査日); 4, 2004調査年(2004年11月-2005年6月, 15調査日); 5, 2005調査年(2005年11月-2006年7月, 15調査日)。研究デザインと在来種資源保護の都合上、各調査年での調査頻度は異なるが、2003-2005調査年における個体数組成はデータ修正をすることなく、そのまま比較できる。鈴木ほか(2007)を改変。

田・三浦, 2001) と類似する。魚食性の種がその餌生物の生息密度と体サイズ組成に大きな影響を及ぼす事例は広く知られているが、その影響が水草やプランクトンにまで波及する例も知られている (林, 2002)。以上のことから、北アメリカ産外来種2種の増殖は、わが国で広範に既存の生態系を置き換えてきたものと推測され、その強力なトップダウン効果は、魚類のみならず魚類以外の水生生物相にも影響が及ぼしている可能性が疑われる。

引用文献

琵琶湖生物資源調査団, 1966. 琵琶湖生物資源調査団中間報告 (一般調査の部). 近畿地方建設局, 1121 pp.
 林 秀剛, 2002. 信州の湖沼—魚食魚ブラックバスと草食魚ソウギョによる攪乱. 日本生態学会 (編), pp. 262–263. 外来種ハンドブック. 地人書館, 東京.
 持田 誠・三浦善祐, 2001. 淀川ワンドのボタンウキクサ. 水草研会報, 72: 1–4.
 中川雅博, 2005. 2004年の滋賀県堅田内湖に発生したボタンウキクサの繁茂状況. 関西自然保護機構会誌, 27: 53–56.
 中川雅博・鈴木誉士, 2007. 琵琶湖の堅田内湖に生息するフナ属魚類を中心とした主要コイ科魚類の季節的消長. 関西自然保護機構会誌, 29: 27–37.
 太田滋規, 2005. 内湖. 滋賀県水産試験場 (編), pp. 76–84. 平成14–15年度琵琶湖および河川の魚類等の生息状況調査報告書. 滋賀県水産試験場, 大津.
 鈴木誉士・中島 淳・中川雅博, 2007. 琵琶湖の堅田内湖に生息するワタカ個体群の季節的消長. 関西自然保護機構会誌, 28: 117–125.
 高橋清孝, 2006. オオクチバスが魚類群集に与える影響. 細谷和海・高橋清孝 (編), pp. 29–36. ブラックバスを退治する—シナイモツゴ郷の会からのメッセージ—. 恒星社厚生園, 東京.
 (中川雅博 Masahiro Nakagawa : 〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見6-2-28 大阪信愛女学院短期大学人間環境学科 e-mail: gf998002@yahoo.co.jp ; 鈴木誉士 Takashi Suzuki : 〒630-8505 奈良市中町3327-204 近畿大学農学部 e-mail: takashi-suzuki@mail.goo.ne.jp)

al., 1993; Mecklenburg et al., 2002). しかし、原記載以降、日本周辺海域から本種が得られた記録はなく、また標準和名も与えられていなかった。

今回、2004年2月に東北区水産研究所が行った東北沖から北海道東沖にかけての中深層性マイクロネクトン調査で得られたサンプル群を精査した結果、*M. acuticeps* の1標本を得た。これは標本に基づく日本から2番目の記録となり、ここに報告するとともに、新たな標準和名を提唱する。

計数・計測方法は、Matsui and Rosenblatt (1987) に従い、脊椎骨の計数には軟X線写真を使用した。本研究で観察した標本は10%ホルマリンで固定された後、70%エタノールに移され、鹿児島大学総合研究博物館 (KAUM: Kagoshima University Museum) に保管されている。

Maulisia acuticeps Sazonov, 1976
 オチバハナメイワシ (新称)
 (図1)

観察標本 KAUM-I.7210, 1個体, 標準体長83.5 mm, 宮城県沖 (38°01'N, 147°20'E), 曳網水深1000–1500 m, 2004年2月12日, 4 m²モクネスネット, 若鷹丸。

計数・計測結果 背鰭鰭条数19, 臀鰭鰭条数17, 胸鰭鰭条数15, 腹鰭鰭条数8, 鰓耙数8+20, 脊椎骨数23+20, 縦列鱗数92, 横列鱗数26, 背鰭中央部の直下から体側中央線までの横列鱗数13, 幽門垂数8。

各部位の測定値における体長比 (標準体長に対する%) : 頭長35.9; 胸鰭基部における体高16.4; 腹鰭基部における体高13.4; 胸鰭基部における体幅5.5; 背鰭前長61.6; 肛門前長62.2; 腹鰭前長56.4; 背鰭基底長20.8; 臀鰭基底長19.0; 尾柄高7.5; 尾柄長17.0; 眼径9.5; 両眼間隔9.0; 吻長10.8; 上顎長19.9; (胸鰭長と腹鰭長はともに破損のため測定不能)。

備考 今回観察した標本は、*M. acuticeps* の原記載や (Sazonov, 1976a), その他の本種に関する研究で示された発光器と肩部孔の欠如, 縦列鱗数と横列鱗数, 鰓蓋部上端が眼窩上縁のほぼ後方に位置するなどの形態的特徴とほぼ一致した (Matsui and Rosenblatt, 1987; Balanov, 1992; Mecklenburg et al., 2002). しかし、計測形質においては、Sazonov et al. (1993) の示した眼径 (標準体長の6.1–8.1%) と上顎長 (16.7–17.7%) の範囲を超えており、

ハナメイワシ科魚類オチバハナメイワシ (新称)
 の日本から2番目の記録
 Second Japanese record of a platytroctid fish,
Maulisia acuticeps Sazonov, 1976

ハナメイワシ科マウルイワシ属の *Maulisia acuticeps* は、Sazonov (1976a) によってペルー沖産の2標本と日本産の1標本に基づき、新種として記載された。その後、本種は南大西洋、オーストラリア東方沖、ベーリング海の中深層から報告されている (Balanov, 1992; Sazonov et



図1. オチバハナメイワシ *Maulisia acuticeps* (KAUM-I.7210, 標準体長83.5 mm)。

一方で胸鰭基部における体高 (19.8–23.2%) はその範囲よりも低い値になった。また、これまで *M. acuticeps* の体色は、ホルマリン固定標本において、体は一様に黒褐色とされていたが (Matsui and Rosenblatt, 1987; Sazonov et al., 1993), 今回観察した標本は、ホルマリン固定後で頭部と肩部の小管のみが黒褐色で、腹部と尾部は淡褐色であった (図1)。この眼径, 上顎長, 体高の測定値と体色について, 同属種のマウルイワシ *M. maui* Parr, 1960 では, 未成熟個体から成熟個体間で成長に伴って変化することが詳しく議論されている (Parr, 1960)。今回観察した *M. acuticeps* の標本 (標準体長 83.5 mm) についても, 解剖の結果, 未成熟個体であったのに対し, 過去に調査された本種の標本 (標準体長 177–255 mm) は成熟個体であったことから, 本研究と過去の知見との計測形質の値と体色の相違は成長段階による種内変異と判断した。

Maulisia acuticeps は, マウルイワシ属のなかで発光器と肩部孔をもたない *Aphanichthys* 亜属の1種で, その他の本亜属種のショウリンハナメイワシ *M. microlepis* Sazonov and Golovan, 1976, と *M. issacsi* Matsui and Rosenblatt, 1987 とは, 背鱗条数が 18–22 (vs. ショウリンハナメイワシは 17–21, *M. issacsi* は 16), 鰓耙数が 8–9+20–22 (vs. 8–9+20–22, 7+19), 縦列鱗数が 90–100 (vs. 112–125, 80), 背鱗中央部の直下から体側中央線までの横列鱗数が 13–16 (vs. 14–19, 11–12), 鰓蓋上端が眼窩上縁のほぼ後方に位置する (vs. 眼窩上縁のほぼ後方, 眼の中央部の後方) という形質の組み合わせにより識別される (Sazonov, 1976b; Matsui and Rosenblatt, 1979, 1987; Sazonov et al., 1993)。一方, 発光器と肩部孔をもつ *Maulisia* 亜属にはマウルイワシ *M. maui* とクズボシハナメイワシ *M. argipalla* Matsui and Rosenblatt, 1979 の2種が知られており, マウルイワシ属は上記の2亜属5種によって構成されている (Matsui and Rosenblatt, 1987)。これらのなかでクズボシハナメイワシと今回得られた *M. acuticeps* の2種が東北沖から採集されており, さらにその他の日本周辺海域から報告されている本科魚類を含めると, 日本産ハナメイワシ科魚類は4属5種となる (中坊, 2000; 岡本ほか, 2007)。

Maulisia acuticeps の原記載において, 日本産の1標本はその採集地点が日本の東沖としか記されておらず (Sazonov, 1976a), 経緯度などの詳細な採集データは不明である。しかし, その後, 出版された論文では, 本種の分布域として東北沖付近が図示されており (Sazonov, 1976b; Sazonov et al., 1993), 原記載の1標本は今回得られた標本の採集地点と近い海域から採集されたと推測される。このように本種は Sazonov らによって日本周辺海域に生息することが示唆され, また多くの海外の研究者によってその見解は踏襲されてきたが (Matsui and Rosenblatt, 1987; Balanov, 1992; Mecklenburg et al., 2002), 我が国においては日本産魚類として認識されておらず, 和名も与えられていなかった。よって, 本種の細長く尖った

頭部と側扁した体形, および体色にちなみ「オチバハナメイワシ」の標準和名を提唱する。

謝 辞

今回, 観察した標本は東北区水産研究所・混合域海洋環境部の調査航海によって得られたものであり, この調査に携わって頂いた調査員, 若鷹丸の船長および乗組員の方々に厚く御礼を申し上げる。また文献を提供して下さった Tomio Iwamoto 博士 (California Academy of Sciences), ロシア語の文献を英訳していただいた Andrey Suntsov 博士 (Northwest Fisheries Science Center NOAA) に感謝の意を表する。

引用文献

- Balanov, A. A. 1992. New discoveries of deep-water fishes in pelagic waters of the Bering Sea. *J. Ichthyol.*, 32: 133–137.
- Matsui, T. and R. H. Rosenblatt. 1979. Two new searsiid fishes of the genera *Maulisia* and *Searsia* (Pisces: Salmoniformes). *Bull. Mar. Sci.*, 29: 62–78.
- Matsui, T. and R. H. Rosenblatt. 1987. Review of the deep-sea fish family Platyroctidae (Pisces: Salmoniformes). *Bull. Scripps Inst. Oceanogr. Univ. Calif.*, 26: 1–159.
- Mecklenburg, C. W., T. A. Mecklenburg and L. K. Thorsteinson. 2002. *Fishes of Alaska*. American Fisheries Society, Bethesda, Maryland. xxxvii+1037 pp.
- 中坊徹次. 2000. ハナメイワシ科. 中坊徹次 (編), pp. 289, 1473. 日本産魚類検索 全種の同定 第2版. 東海大学出版会, 東京.
- 岡本 誠・杉崎宏哉・内田和久・李 雅利・岡崎雄二. 2007. 東北沖から採集された日本初記録のハナメイワシ科魚類クズボシハナメイワシ (新称) *Maulisia argipalla*. *魚類学雑誌*, 54: 197–202.
- Parr, A. E. 1960. The fishes of the family Searsidae. *Dana Rept.*, 51: 1–109.
- Sazonov, Y. I. 1976a. New species of fishes of the family Searsidae (Salmoniformes, Alepocephaloidei) from Pacific Ocean. *Trudy Inst. Okeanol. Akad. Nauk. SSSR*, 104: 13–25 (in Russian with English summary).
- Sazonov, Y. I. 1976b. Materials on the systematics and distribution of fishes of the family Searsidae (Salmoniformes, Alepocephaloidei). *Trudy Inst. Okeanol. Akad. Nauk. SSSR*, 104: 26–72 (in Russian with English summary).
- Sazonov, Y. I. and G. A. Golovan. 1976. New species of fishes of the family Searsidae (Salmoniformes, Alepocephaloidei) from the eastern Atlantic Ocean. *Trudy Inst. Okeanol. Akad. Nauk. SSSR*, 104: 7–12 (in Russian with English summary).
- Sazonov, Y. I., A. A. Balanov and V. V. Fedorov. 1993. Alepocephaloid fishes (Alepocephaloidei) from the western North Pacific Ocean. *Trudy Inst. Okeanol. Akad. Nauk. SSSR*, 128: 40–68 (in Russian with English summary).

(岡本 誠 Makoto Okamoto・山口敦子 Atsuko Yamaguchi ; 〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学水産学部 海洋動物学研究室 e-mail: okamoto@nagasaki-u.ac.jp ; 杉崎宏哉 Hiroya Sugisaki ; 〒236-8648 神奈川県横浜市金沢区福浦2-12-4 独立行政法人 水産総合研究センター中央水産研究所 ; 本村浩之 Hiroyuki Motomura ; 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 鹿児島大

学総合研究博物館)

魚類学雑誌
55(1): 61-62

キホウボウ科ナンヨウキホウボウの種名
A species name for a peristediid fish having a
Japanese name, "Nanyou-kihoubou"

本報告では、日本産キホウボウ科魚類のナンヨウキホウボウの種名について再検討を行った。計数および計測方法はKawai et al. (2004) に従った。本報告で観察した標本は高知大学理学部 (BSKU)、北海道大学総合博物館 (HUMZ)、国立科学博物館 (NSMT) および米国スミソニアン協会 (USNM) に所蔵されている。

ナンヨウキホウボウの種名は、蒲原 (1952) が *Satyrichthys hians* (Gilbert and Cramer, 1897) を用いて以降、多くの研究者がこの種名を用いている (松原, 1955; 落合・矢頭, 1984; 矢頭, 1997; 山田, 2000 など)。一方、矢頭 (1985) は、吻突起の形状、髭数および髭の状態からナンヨウキホウボウの種名は *S. hians* ではなく、*Nemaperistedion orientale* Fowler, 1938 であると指摘した。しかし、タイプ標本との比較が無かったためか、現在ナンヨウキホウボウの種小名に *orientale* を用いる研究者はいない。Kawai (2008) は系統類縁関係を基にキホウボウ科の属の再定義を行い、両種はヒゲキホウボウ属 *Scalicus* に含まれることを明らかにした。今回、ナンヨウキホウボウの標本を *S. orientalis* のホロタイプと *S. hians* のレクトタイプと比較した結果、ナンヨウキホウボウは吻突起が長三角形状、髭数が5-6+3、最長髭から分枝する小髭が幅広い皮膜を備える、および最長髭が肛門を越えるなどで、*S. orientalis* のホロタイプとよく一致した。また、従来のナンヨウキホウボウの記載または写真も、吻突起は長三角形状であることで、*S. orientalis* のホロタイプの特徴と一致した (蒲原, 1952; 松原, 1955; 落合・矢頭, 1984; 矢頭, 1985, 1997; 山田, 2000)。一方、*S. hians* のレクトタイプは、吻突起が正三角形状、髭数が6-7+3、最長髭から分枝する小髭が幅広い皮膜を備えない、および最長髭が肛門に達しないなどで、明らかにナンヨウキホウボウとは異なる。よって、ナンヨウキホウボウの種名は *Scalicus orientalis* とすることが適当である。

観察標本 *Scalicus hians*: USNM 47730, レクトタイプ、標準体長154.7 mm, ハワイ (21°12'N, 157°49'W), 水深539 m, 1891年12月4日。ナンヨウキホウボウ *Scalicus orientalis*: USNM 98876, ホロタイプ、標準体長146.1 mm, インドネシア (0°16'30"N, 127°30'00"E), 水深497 m, 1909年11月29日; BSKU 353, 363, 2個体、標

準体長90.1, 91.2 mm, 高知市御豊瀬漁港, 1951年4月11日; BSKU 1608, 1609, 2個体、標準体長78.6, 90.3 mm, 高知市御豊瀬漁港, 1952年1月24日; BSKU 29746, 1個体、標準体長175.4 mm, 沖縄舟状海盆 (25°59.0'N, 125°51.0'E), 水深430 m, 1979年10月10日; BSKU 40991, 1個体、標準体長70.5 mm, 高知市御豊瀬漁港, 水深約250 m, 1985年2月26日; BSKU 41027, 1個体、標準体長81.5 mm, 高知市御豊瀬漁港, 1985年3月13日; BSKU 43322, 1個体、標準体長121.8 mm, 高知市御豊瀬漁港, 1986年10月18日; BSKU 58515, 58516, 2個体、標準体長84.7, 84.8 mm, 高知市御豊瀬漁港, 2001年12月10日; BSKU 62260, 1個体、標準体長87.0 mm, 高知市御豊瀬漁港, 2003年1月13日; HUMZ 39019, 1個体、標準体長81.2 mm, 高知市御豊瀬漁港, 1974年3月2日; NSMT-P 69577, 1個体、標準体長138.5 mm, 東シナ海 (30°29.0'N, 127°56.9'E から 30°27.5'N, 127°56.7'E), 水深399 m, 2003年11月6日, 篠原現人採集。

謝 辞

標本の調査にご協力頂いた篠原現人博士 (NSMT)、遠藤広光博士 (BSKU)、Jeffrey T. Williams博士、および Sandra J. Raredon 女史 (USNM) に対し、謹んで感謝の意を表する。

引用文献

- Fowler, H. W. 1938. Descriptions of new fishes obtained by the United States Bureau of Fisheries steamer "Albatross", chiefly in Philippine seas and adjacent waters. Proc. U. S. Natl. Mus., 85: 31-135.
- Gilbert, C. H. and F. Cramer. 1897. Report on the fishes dredged in deep water near the Hawaiian Islands, with descriptions and figures of twenty-three new species. Proc. U. S. Natl. Mus., 19: 403-435, pls. 36-48.
- 蒲原稔治. 1952. 本邦産キホウボウ科魚類の研究. 魚類学雑誌, 2: 1-13.
- Kawai, T. 2008. Phylogenetic systematics of the family Peristediidae (Teleostei: Actinopterygii). Spec. Div., 13 (in press).
- Kawai, T., H. Imamura and K. Nakaya. 2004. *Paraheminodus kochiensis* Kamohara, 1957 (Teleostei: Peristediidae), a junior synonym of *Paraheminodus murrayi* (Günther, 1880), with a comparison of *Paraheminodus murrayi* and *Paraheminodus laticephalus* (Kamohara, 1952). Ichthyol. Res., 51: 73-76.
- 松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索 I-III. 石崎書店, 東京. 1605 pp.
- 落合 明・矢頭卓児. 1984. ナンヨウキホウボウ. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫 (編), p. 321 (解説), pl. 301-J, K (図版). 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- 山田梅芳. 2000. キホウボウ科. 中坊徹次 (編), pp. 610-613, 1529. 日本産魚類検索全種の同定. 第二版. 東海大学出版会, 東京.
- 矢頭卓児. 1985. ナンヨウキホウボウ. 岡村 収 (編), pp. 594-595. 沖縄舟状海盆及び周辺海域の魚類 II. 社団法人日本水産資源保護協会, 東京.
- 矢頭卓児. 1997. キホウボウ科. 岡村 収・尼岡邦夫 (編・監修), pp. 216-217. 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.

(河合俊郎 Toshio Kawai: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館標本資料センター e-mail: kawai@kahaku.go.jp; 矢頭卓児 Takuji Yato: 〒657-0804 兵庫県神戸市灘区域の下通1-5-1 兵庫県立神戸高等学校 e-mail: hudec200@hi-net.zaq.ne.jp)

魚類学雑誌
55(1): 62-63

ヒイラギ科魚類各属の標準和名

Standard Japanese names for the six leiognathid genera

スズキ亜目ヒイラギ科魚類は、1970年代以降最近までコバンヒイラギ属 *Gazza*、ヒイラギ属 (以降、旧ヒイラギ属と呼ぶ) *Leiognathus* およびウケグチヒイラギ属 *Secutor* の3属から構成されると考えられてきた (James, 1978, 1984; Jones, 1985; Woodland et al., 2001)。このうち、コバンヒイラギ属とウケグチヒイラギ属はともに属内の分類学的再検討がほぼ終了し (Mochizuki and Hayashi, 1989; Yamashita et al., 1998; Kimura et al., 2000; Yamashita and Kimura, 2001)、これらの属の有効性と和名に問題はない。これに対し、旧ヒイラギ属は60以上の名義種を含む巨大な分類群で、形態的多様性も高く、未だ全体的な分類学的整理は終了していない。

一方20世紀初頭には、旧ヒイラギ属の細分化が行われ、Fowler (1904) は *Equulites* と *Eubleekeria* の2亜属を創設し、その後さらに1亜属 *Aurigequula* を創設した (Fowler, 1918)。Whitley (1932) はこれらの3亜属を属に昇格させ、これらにコバンヒイラギ属、ウケグチヒイラギ属、*Argylepes*、*Equula* および *Leiognathus* を加えるとともに、*Macilentichthys* と *Eubleekeria* 内の亜属 *Nuchequula* を創設して、ヒイラギ科を9属1亜属に分類した。しかし、その後の研究者はコバンヒイラギ属、ウケグチヒイラギ属、旧ヒイラギ属のみを認め、これら以外の属や亜属を有効な分類群として扱った研究はほとんどない。

今世紀に入り、再び旧ヒイラギ属の細分化が行われ、Kimura et al. (2003, 2005) は旧ヒイラギ属に含まれる各種を形態的に類似した種群に分け、*L. aureus* 種群と *L. splendens* 種群の分類学的再検討を行った。一方 Sparks et al. (2005) は、雄の発光器と関連した体側無色素域の形状や分子系統情報に基づいて、*Photopectoralis* と *Photoplagios* の2属を創設した。さらに Chakrabarty and Sparks (2007) および Kimura et al. (2008a) は *Nuchequula* を亜属から属に昇格させた。また、Kimura et al. (2008b) は *Eubleekeria* を有効属と認め、Kimura et al. (2008c) では *Photoplagios* を *Equulites* の新参シノニムとした。この結果、旧ヒイラギ属は現在 *Eubleekeria*、*Equulites*、*Leiognathus*、*Nuchequula* および *Photopectoralis* の5属に分けられることになる。これら5属にはそれぞれ日本産種が

含まれることから、今後の混乱を避けるために、これらの属の標準和名を提唱すべきであると考えた。さらにヒイラギ *Nuchequula nuchalis* は *Leiognathus* ではなく *Nuchequula* に属することが明らかになったことから (Chakrabarty and Sparks, 2007; Kimura et al., 2008a)、今後は *Leiognathus* を「ヒイラギ属」と呼ぶのは不適當である。

以上のような状況から、本文においてイトヒキヒイラギ属 *Equulites*、タイワンヒイラギ属 *Eubleekeria*、セイタカヒイラギ属 *Leiognathus*、およびキビレヒイラギ属 *Photopectoralis* の新和名を提唱するとともに、*Nuchequula* に対してヒイラギ属という和名を用いることを提案する。なお現在までに知られている日本産ヒイラギ科魚類の属と種は以下のように整理される。

イトヒキヒイラギ属 (新称) *Equulites*. タイプ種は *L. vermiculatus* [*Equulites leuisiscus* (標準和名イトヒキヒイラギ) の新参シノニム (Jones, 1985; Sparks, 2006; 木村, 未発表データ)]. 日本産種はイトヒキヒイラギ、ヒメヒイラギ *Equulites elongatus* およびオキヒイラギ *Equulites ribulatus* の3種が含まれる。

タイワンヒイラギ属 (新称) *Eubleekeria*. タイプ種は *Equula splendens*. 日本産種はタイワンヒイラギ *Eubleekeria splendens* のみである。

コバンヒイラギ属 *Gazza*. タイプ種は *G. equulaeformis* [*G. minuta* (標準和名コバンヒイラギ) の新参シノニム (Yamashita et al., 1998)]. 本邦産本属魚類はオオメコバンヒイラギ *G. achlamys*、コバンヒイラギおよびヒシコバンヒイラギ *G. rhombea* の3種が知られている。

セイタカヒイラギ属 (新称) *Leiognathus*. タイプ種は *L. argenteus* で、属の和名は本タイプ種が *L. equulus* (標準和名セイタカヒイラギ) の新参シノニムであること (Fricke, 1999; 木村, 未発表データ) から提唱した。現在のところ本属に含まれる本邦産種はセイタカヒイラギとシマヒイラギ *L. fascianus* の2種である。

ヒイラギ属 (新定義) *Nuchequula*. タイプ種は *Equula blochii*. 本タイプ種は日本に分布せず、本邦産本属魚類はヒイラギのみである。このため、多少の混乱が生じる可能性を否定できないものの、本属に対してヒイラギ属という標準和名を用いることが妥当であると考えた。

キビレヒイラギ属 (新称) *Photopectoralis*. タイプ種はキビレヒイラギ *P. aureus*. 本属の日本産種はキビレヒイラギとネッタイヒイラギ *P. bindus* の2種である。

ウケグチヒイラギ属 *Secutor*. タイプ種は *Zeus insidiator*. 本邦からは現在のところヤンバルウケグチヒイラギ *S. megalolepis* のみが知られている。

引用文献

- Chakrabarty, P. and J. S. Sparks. 2007. Phylogeny and taxonomic revision of *Nuchequula* Whitley 1932 (Teleostei: Leiognathidae), with the description of a new species. *Am. Mus. Novitates*, 3588: 1-25.
- Fowler, H. W. 1904. A collection of fishes from Sumatra. *J. Acad.*

Nat. Sci. Phila. (Ser. 2), 12: 495–560.

Fowler, H. W. 1918. New and little-known fishes from the Philippine Islands. Proc. Acad. Nat. Sci. Phila., 70: 2–71.

Fricke, R. 1999. Fishes of the Mascarene Islands (Réunion, Mauritius, Rodriguez). An annotated checklist with descriptions of new species. Koeltz Scientific Books, Königstein, Germany. viii+759 pp.

James, P. S. B. R. 1978. A systematic review of the fishes of the family Leiognathidae. J. Mar. Biol. Assoc. India, 17: 138–172.

James, P. S. B. R. 1984. Leiognathidae. Pages “Leiog”–“Leiog Sec 2” in W. Fischer and G. Bianchi, eds. FAO species identification sheets for fishery purposes, Western Indian Ocean (fishing area 51), vol. 2. FAO, Rome.

Jones, G. 1985. Revision of the Australian species of the fish family Leiognathidae. Aust. J. Mar. Freshw. Res., 36: 559–613.

Kimura, S., T. Yamashita and Y. Iwatsuki. 2000. A new species, *Gazza rhombea*, from the Indo-West Pacific, with a redescription of *G. achlamys* Jordan & Starks, 1917 (Perciformes: Leiognathidae). Ichthyol. Res., 47: 1–12.

Kimura, S., P. V. Dunlap, T. Peristiwady and C. R. Lavilla-Pitogo. 2003. The *Leiognathus aureus* complex (Perciformes: Leiognathidae) with the description of a new species. Ichthyol. Res., 50: 221–232.

Kimura, S., T. Ito, T. Peristiwady, Y. Iwatsuki, T. Yoshino and P. V. Dunlap. 2005. The *Leiognathus splendens* complex (Perciformes: Leiognathidae) with the description of a new species, *Leiognathus kupanensis* Kimura and Peristiwady. Ichthyol. Res., 52: 275–291.

Kimura, S., R. Kimura and K. Ikejima. 2008a. Revision of the genus *Nuchequula* with descriptions of three new species (Perciformes: Leiognathidae). Ichthyol. Res., 55: 22–42.

Kimura, S., K. Ikejima and Y. Iwatsuki. 2008b. *Euhleekeria* Fowler 1904, a valid genus of Leiognathidae (Perciformes). Ichthyol. Res., 55: (in press).

Kimura, S., H. Motomura and Y. Iwatsuki. 2008c. *Equalites* Fowler 1904, a senior synonym of *Photoplagios* Sparks, Dunlap, and Smith 2005 (Perciformes: Leiognathidae). Ichthyol. Res., 55: (in press).

Mochizuki, K. and M. Hayashi. 1989. Revision of the leiognathid fishes of the genus *Secutor*, with two new species. Sci. Rep. Yokosuka City Mus., 37: 83–95.

Sparks, J. S. 2006. A new species of ponyfish (Teleostei: Leiognathidae): *Photoplagios* from Madagascar, with a phylogeny for *Photoplagios* and comments on the status of *Equula lineolata* Valenciennes. Am. Mus. Novitates, 3526: 1–20.

Sparks, J. S., P. V. Dunlap and W. L. Smith. 2005. Evolution and diversification of a sexually dimorphic luminescent system in ponyfishes (Teleostei: Leiognathidae), including diagnoses of two new genera. Cladistics, 21: 305–327.

Whitley, G. P. 1932. Some fishes of the family Leiognathidae. Mem. Queensl. Mus., 10: 99–116. pls. 13–14.

Woodland, D. J., S. Premchaoen and A. S. Cabanban. 2001. Leiognathidae. Pages 2792–2823 in K. E. Carpenter and V. H. Niem, eds. FAO species identification guide for fishery purposes. The living marine resources of the Western Central Pacific, vol. 5, bony fishes part 3 (Menidae to Pomacentridae). FAO, Rome.

Yamashita, T., S. Kimura and Y. Iwatsuki. 1998. Validity of the leiognathid fish, *Gazza dentex* (Valenciennes in Cuvier and Valenciennes, 1835), with designation of a lectotype, and redescription of *G. minuta* (Bloch, 1795). Ichthyol. Res., 45: 271–280.

Yamashita, T. and S. Kimura. 2001. A new species, *Gazza squamiventralis*, from the east coast of Africa (Perciformes: Leiognathidae). Ichthyol. Res., 48: 161–166.

(木村清志 Seishi Kimura : 〒517-0703 志摩市志摩町和具4190-172 三重大学大学院水産実験所 e-mail: kimura-s@bio.mie-u.ac.jp ; 木村良子 : 〒421-0212 静岡県大井町利右衛門1334-5 いであ株式会社環境創造研究所 ; 池島 耕 Koh Ikejima : Japan Society for the Promotion of Science (JSPS), Bangkok Office, 113 TWY Office Center, 10th Fl. Serm-mit Tower, 159 Sukumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand ; 本村浩之 Hiroyuki Motomura : 〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館 ; 岩槻幸雄 Yukio Iwatsuki : 〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学農学部 ; 吉野哲夫 Tetsuo Yoshino : 〒903-0213 沖縄県西原町千原 琉球大学理学部)

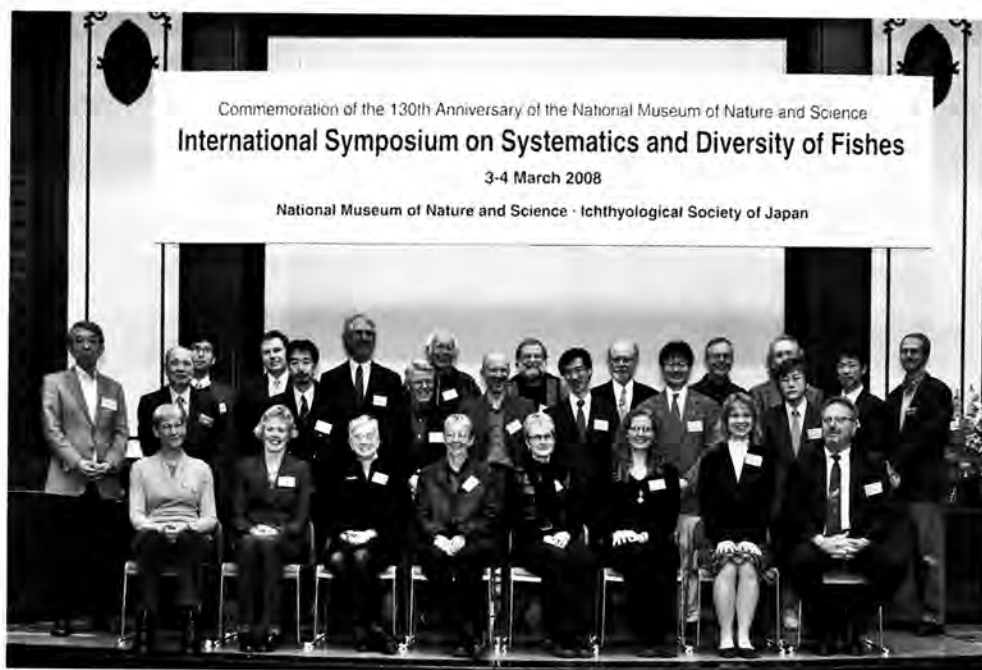
魚類学雑誌
55(1): 63–65

トピックス

国立科学博物館開館130年記念 魚類の系統と多様性に関する国際シンポジウム Commemoration of the 130th Anniversary of the National Museum of Nature and Science International Symposium on Systematics and Diversity of Fishes

表記のシンポジウムが上野の国立科学博物館で2008年3月3–4日に魚類学会と国立科学博物館(科博)の共催によって実施された。参加者は124名で、その内訳は招待講演者23名(海外から16名, 国内7名)、彼らの同伴者8名、一般参加者が93名であった。一般参加者によるポスター発表は46題であった。国内外の研究者の招聘の費用、会場設営やレセプションの企画は科博が担当し、プログラム作成とシンポジウムの運営を魚類学会が受け持った。組織委員会は科博の松浦啓一氏(委員長, 前魚類学会会長)、東京大学海洋研究所(海洋研)の西田 睦氏(副委員長, 現魚類学会会長)、海洋研の馬淵浩司、昆 健志、佐藤 崇の3氏と科博の篠原(筆者)であった。

シンポジウム初日の3月3日は9時から一般参加者の受付を開始し、懐かしい顔が多数混じった海外招待研究者もこの時間に姿を現した。定刻どおり9時30分からシンポジウムが始まり、魚類学会を代表して西田会長が開会の挨拶を述べ、続いて「生物地理に関するセッション」がおこなわれた。このセッションでは生態、魚類相、回遊といった多岐にわたる話題が5題発表された。座長は前半の3題をAustralian MuseumのJeffrey M. Leis氏が、後半2題を筆者が務めた。最初にDavid R. Bellwood氏(James Cook University)が、グレートバリアリーフに生



招待講演者たちとの記念撮影。前列左から、Christine Thacker, Paula Mabee, Lynne Parenti, Helen Larson, Dianne Bray (Gomon 夫人), Judith Mank, Naomi Delventhal, Richard Mayden。2列目左から松浦啓一, 上野禪彌 (名誉会員), 今村 央, John Paxton, Ralf Britz, 西田 睦, 宮 正樹, 瀬能 宏, 益田玲爾, Randall Mooi。3列目左から篠原現人 (筆者), Wm. Leo Smith, Jeffrey Leis, Richard Winterbottom, G. David Johnson, Douglass Hoese, Martin Gomon, David Bellwood (敬称略)。石森博雄氏撮影, 2008年3月4日。

息する魚類の生態を紹介しながら、生態系全体からみた個別の魚たちの役割、特に小型ハゼ類の早い成長率等に注目しながらその役割の重要性について紹介した (A tale of two fishes: Unseen and unsung heroes on the Great Barrier Reef—Lessons we can learn from gobies and batfishes). Martin F. Gomon 氏 (Museum Victoria) はオーストラリア沿岸から大陸棚斜面までの生物多様性や資源利用に関するプロジェクト研究について発表した (Inferring multi-scale habitat distributions from species ranges—An Australian perspective)。益田玲爾氏 (京都大学舞鶴水産実験所) は、若狭湾の魚類相の経時変化について報告し、30年前との違いを日本海の水温上昇との関連で説明した (Seasonal and interannual variation of subtidal fish assemblages in Wakasa Bay revealed by underwater visual census with reference to the warming trend in the Sea of Japan)。

コーヒーブレイクをはさみ、松浦啓一氏 (科博) は水中写真データベースを活用して、黒潮と沿岸性魚類相成立との関係について発表した (Zoogeographical role of the Kuroshio Current: Transportation system and barrier for coastal fishes of southern Japan)。塚本勝巳氏 (海洋研) はウナギ類の産卵に関する「海山説」や「新月説」、さらに回遊メカニズムや進化パターンについて概説した (Migratory behavior has driven the evolution in anguillid eels)。

午後は「多様性と分類に関するセッション」がおこなわれ、ハゼ亜目に関する話題が5題発表された。このセッションの座長は前半3題を筆者が、後半2題を Australian Museum の Douglass F. Hoese 氏が務めた。セッションの最初から天皇陛下がご出席された。Richard Winterbottom 氏 (Royal Ontario Museum) はベニハゼ属の分類と生態を紹介し、生物の進化的解釈にフィードバック出来る新しい材料の宝庫であることを紹介した (Ask not what evolution can do for *Trimma*—Ask what *Trimma* can do for evolution)。Naomi Delventhal 氏 (University of Manitoba) はハゼ類の系統分類の現状と問題点についてイサゴハゼ属を中心に紹介した (Gobioid genera need re-examination: A case study of *Gobiopsis*)。Douglass Hoese 氏はウロハゼ属の分類を分布域との関係で見直す必要性を示唆した (Radiation of *Glossogobius* in freshwaters of the Indo-west Pacific)。

コーヒーブレイクの後、Helen K. Larson 氏 (Museum and Art Gallery of Northern Territory) が現在取り組んでいるハゼ科 *Redigobius* 属の系統分類の進捗状況を紹介した (The goby genus *Redigobius* and its relationships—A work in progress)。Christine Thacker 氏 (Natural History Museum of Los Angeles County) はハゼ亜目の分子系統樹を用い、形態や生態に見られる種多様性の増大が進化の複数の段階で獲得されたものであると発表した (Phylogenetics of

the gobioid fishes: Diversity, taxonomy, and ecology).

このセッションの後、17時5分からポスターセッションが始まった。その中で本村浩之氏（鹿児島大学総合博物館）によるカンボジアの淡水魚類相に関する発表（Freshwater fish diversity in Cambodia）と矢部 衛氏（北海道大学大学院）によるカサゴ目の所属不明種に関する発表（A peculiar fish collected from southern Okhotsk Sea off the Shiretoko Peninsula: Is it a new family?）を含む数題の発表を天皇陛下もご覧になられた。18時15分からポスター会場に隣接する中央ホールでレセプションが始まり、参加者が談笑しながら研究上の情報交換を行い、20時に終了した。

3月4日は好天で気持の良い1日だった。9時から「進化と体系学に関するセッション」が始まり、6題の形質進化や系統推定に関する研究が発表された。座長は前半の3題を Australian Museum の John R. Paxton 氏、後半の3題を海洋研の西田 陸氏が務めた。Paula Mabee 氏（University of South Dakota）は鰻弓形態を例として、魚類のボディプランに関するゲノム科学の進展と将来について発表した（Windows into the architecture of fishes）。宮正樹氏（千葉県立中央博物館）は条鰭類を対象としたミトコンドリアゲノム研究の総括を行い、分子系統樹と化石記録の照合で進化を論じた（Evolutionary history of modern ray-finned fishes: An overview based on 327 whole mitogenome sequences）。Judith E. Mank 氏（Uppsala University）は繁殖に関わる形質の進化を包含系統樹（スーパーツリー）に基づいて推定した（The evolution of fish diversity: Lessons from large-scale comparative analysis）。

コーヒーブレイクの後に Wm. Leo Smith 氏（Field Museum of Natural History）は、スズキ系魚類の系統分類について到達点と問題点を示し、未解決問題の解決に分岐学への回帰を唱えた（Refining our understanding of the limits and relationships of Percomorpha: Discovering large clades and the taxonomic challenges they present）。Richard Mayden 氏（Saint Louis University）は米国で展開中のコイ目の巨大プロジェクトの進捗状況と今後の戦略について紹介した（Evolutionary origin and phylogenetic relationships of the Cypriniformes: A multi-gene approach to resolving the evolution of the world's most diverse group of freshwater fishes）。セッション最後に Ralf Britz 氏（The Natural History Museum）は非常に小さい体をもつコイ目魚類の進化について発表した（*Paedocypris*—A developmentally truncated miniature cyprinid with astonishingly complex novel structures）。

昼食後に50分間のポスターセッションを経て、その後「系統と個体発生に関するセッション」がおこなわれ、6題の講演があった。座長は前半の2題を松浦啓一氏が、後半の3題を Ralf Britz 氏が務めた。Lynne R. Parenti 氏（National Museum of Natural History）はメダカ類の系統を分子データと形態データの対比により論じ、両者のデータがまだ十分でないことを紹介した（Phylogeny of the

Medaka and relatives: Molecules versus morphology）。今村央氏（北海道大学総合博物館）は共有派生形質の新解釈によりカサゴ目の非単系統性を論じた研究を紹介した（“Scorpaeniform” phylogeny: Morphological approach to a question of its monophyly）。

コーヒーブレイクの後に Jeffrey Leis 氏（Australian Museum）は成魚と仔稚魚の形質を用いて類縁関係が不明であったダトニオ類、マツダイ類、ヒゲダイ類の近縁性を説明し、形態形質の系統解析における有用性を紹介した（Tigerfishes, tripletails, and velvetchins form a clade: Morphological evidence from adults and larvae）。John Paxton 氏（Australian Museum）はクジラウオ科、トクビレイワシ科およびソコクジラウオ科の分類学的な関係について仔稚魚の形態と分子データを用いて解明した（The cetomimoid conundrum resolved—Whalefishes (Cetomimidae), tapetails (Mirapinnidae), and bignose fishes (Megalomycteridae): Amazing larval transformations and striking sexual dimorphism）。最後に G. David Johnson 氏（National Museum of Natural History）が遠洋水産研究所から国立科学博物館に移管された膨大な仔稚魚標本を紹介し、学術的に極めて高い価値があることを紹介した（Rare, interesting, and scientifically valuable larval fish specimens from the collections of the Far Seas Fisheries Research Laboratory, now housed at the National Museum of Nature and Science）。シンポジウムの最後に松浦氏がシンポジウムの運営に当たった運営委員を壇上に招き、簡潔に閉会の挨拶を行った。海外からの招待講演者は翌日と翌々日に葛西臨海水族園と築地魚市場の見学に出かけた。

本報告の最後に、シンポジウム開催に当たりお世話になった科博の佐々木正峰館長、経営管理部の平野仁司部長ほか多くの科博の皆さんに感謝の意を表す。また、葛西臨海水族園の上田恭幸園長をはじめとするスタッフの皆さんは休園日にもかかわらずエクスカッションのために園内を案内して下さいました。組織委員を代表してお礼を申し上げる。なおポスター発表の演題・演者の情報を含む講演要旨集は魚類学会と科博のウェブページから無料でダウンロードできる。

（篠原現人 Gento Shinohara : 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: s-gento@kahaku.go.jp）

魚類学雑誌
55(1):66-73

インタビュー

先達に聞く

O=岡村 収先生 インタビューする人 M=松浦啓一
E=遠藤広光；2006年7月30日

M：先生は昭和8年に、高知県の愛媛県境に近い所で
お生まれになったそうですが？

O：そうです。昭和8年に仁淀川の県境の当時の別府
村（現在は仁淀川町に含まれる）という所です。

M：少しご家族のことも伺わせて頂きたいのですが、
ご兄弟は何人ですか？

O：兄弟は6人です、男4人、女2人で、私は本来3
番目ですけど、産まれてすぐ長男がなくなっているから、
実質次男、名目三男ですね。

M：小さい頃から生き物に関心を持っておられたので
しょうか。

O：仁淀川育ちですからね、四国で2番目の水がめ
の大渡ダムというのがありますが、それが出来たら水没す
る予定だった四国電力の岩屋川発電所の所長を親父が
やっていました。私はそこの社宅で生まれました。親父
が出世すると大きい発電所に移っていくので、より下流
の大崎にある土居川発電所という所に移り、小学3年ま

でそこにいました。ですから川遊び、水泳、魚とりとい
うのは自然になじんで身につけていました。

M：先生が高知大学に入学された頃、教養課程で既
に魚に興味を持っていたのでしょうか？

O：いや、全然持ってなかったですね。本来は医学志
望だったんです。担任からも、京大医学部は難しいだろ
うけど、徳島大学医学部だったら何とかなるかも知れん
と言われてました。昭和27年ですよ、経済的に苦しく
て、自分の希望通り県外へ出られる学生は半分もいな
かったんじゃないかな。だから相当優秀な連中も地元の高
知大に残っていました。僕なんか一度目標を失ったま
ま、一応は入っとくという格好で入っていました。それ
で2年の時は挫折して休学したんです。

M：ほう……！

O：やることがないから、それも退学届けを出してね。
しかし、当時良かったのは、高知大学にはいろんなプ
ライベートな、生活状況を見る補導教官制というのがあ
ったんです。僕の補導教官というのが、ドイツ語の先生
でしたが、いきなり退学届けが出たんでビックリして親
父に連絡してきました。親父が飛んでいって補導教官と
相談して、本人が目標を失っているから、休学にしとけ
ば月謝はいらないし、復学する時に戻りやすいからと言
われて、休学にしたわけです。勝手に休学に切り替えて
くれてたわけです。

そして、3年になる時に、何とか復学して、真正面か



岡村 収氏(1933-) 自宅の研究室にて

ら向き合おうとしました。それまで、7~8単位しかとってなかったんです。当時、必要な単位は2年間で56単位です。そこで、一気に2年分を1年でとりました。語学は16単位、他人の倍取りました。

M：蒲原先生との出会いについてお聞かせ下さい。

O：生物には元々全般的に興味があったから、生物学科へ出入りをしてたんです。生物学科には当時4人しか先生がいませんでした。その中の一人が蒲原先生でした。3年の時に、蒲原先生と顔を合わすし、言葉を交わすようになりました。僕は追手前高校の時に生物部でしてね、学園祭なんかあると、魚類の展示と説明は私の責任でやりよったんですわ。そして、蒲原先生との出会いもあったので、魚をやるのかなと思ったわけです。

M：3年生の頃から、蒲原先生の研究室へ出入りするようになったと言うことですか？

O：ええ、3回生の時からでしょうね。

M：そうですね。当時、蒲原先生は盛んに御豊瀬に通っておられたのでしょうか？

O：通っておられました。私は、3回生のとき、最初は自転車で行ってました。4年になった時かな、尼岡さん(2つ年下だから、2回生だったと思います)を連れて行ってやってくれないかって、蒲原先生から言われました。それで、自転車と一緒に行くことになりました。SBカレーかなんかの空き缶に適切なサイズのロープをつけて、ドウラン代わりにして使いました。

M：ソコダラ類の研究はいつから始まったのですか？

O：蒲原先生のところで魚学をやることになった時に、蒲原先生がソコダラ類とヒラメ類、シタピラメ類の3つのテーマを出されてね。この中から好きなものを選ぶことになりました。形態変化がソコダラ類は大きいのと、発光器を持っている点に興味をもちました。僕は進化自体に興味があったから、ソコダラの方が多様性と種の分化が高いのではないかなと思って、それでソコダラを選んだわけです。

M：最初に新種を見つけたのはいつ頃ですか？

O：京大院生時代、トラギス類のソコトラギスかな、蒲原先生が間違えて、この新種の記載の時に、側線に4つほど黒点を描いてますけど、混獲されたイカの墨なんです。私が見つけて採集したので、*Parapercis okamurai* という学名をつけてくれました。1960年に発表してますね。ほら、黒点描いているでしょ？ これ、イカの墨なんですよ。

M：では、先生ご自身が発表された新種を最初に採られたのはいつ頃ですか？大学院に行かれてからですか？

O：直感的にこれは新種と思ったのは *tomiyamai* にした東大の標本 (*Nezumia tomiyamai* (Okamura, 1963) トミヤマヒゲ) とか、それから、独立の属にした *Pseudonezumia* (1970年に新属として設立したニホンソコダラ属；模式種は *P. japonicus* Okamura, 1970 ニホンソコダラ)、これなんかはもう、直感的に新種だと思いました。

M：蒲原先生の教え方、指導の仕方というのはどうで

したか？

O：手をとって教えるということは絶対にないですね。自分でいろいろと調べて、困って、先生に相談に行くでしょ。そうすると一番参ったのはね、「ソコダラに日本で一番詳しいのはお前じゃないか」って言うんですよ。しかし、突っ放すんじゃなくてね、それだったらこれを読んでみるんだよって、バツと頭に思い浮かんだ論文を、読めと言ってくれるんです。で、それを読むと必ず自分の疑問に思っていることがほとんど解けるという、だから、あまり直接的には教えなくて、徹底して自分で調べろと言うやりかたでした。

ところが、沖山さんなんかの話聞くと、羨ましかったですね。沖山さんは僕よりちょっと若いのかな？蒲原先生から「お前、新潟にすごい魚の研究熱心な奴がおるぞ、いろんなことを問い合わせてくる」と言われて、それが沖山さんでした。沖山さんは、僕なんかを書いていない頃にもう論文も書いていました。そういう外部の方にはね、羨ましくなるぐらい懇切丁寧にちゃんと教えてますね。だから、独特の教え方と言うか、ある程度突っ放したかのように見えるけど、自分で探っていく道標は与えてくれました。

M：蒲原先生は号を呑海というくらいですから、お酒もたくさん飲まれたと思うんですけど。

O：飲みましたねえ。

M：研究室で飲む会はあったんですか？

O：研究室というよりは、お宅で飲む会というか、いわゆるコンパをお宅でやりました。

M：カツオの吊し食いというのがあったそうですね。

O：ああ、カツオの吊し食いやりましたねえ。あの時、酒の肴が足りなくてね。蒲原先生がカツオでも一匹買って来いって、ついでに丸ごと吊り下げて、カツオの丸食いをしようって言い始めてね。そしたら奥さんがそれを聞いて、「岡村さん、絶対ダメですよ。ちゃんとハラワタさばいてね、頭を刎ねてもらってきなさい。3枚におろすのはこっちでやってあげます」って。魚屋に野田というのと2人で行ってね、二人で考えまくってね、丸ごと買って帰ったら奥さんに怒られそうだし、捌いて持って帰ったら、先生がガックリきそうだし。結局、丸ごと持って帰ってね。そしたら、奥さんが「そこまでやりたかったら、こうしてあげるから勝手にやりなさい」って言ってね、さわち皿を持ってきて、カツオの下に受けたと思ったら、胸ビレの所からザクーっと思刃入れてね、そしたらハラワタがドロドロどきーっ落ちて、一瞬にしてその辺り、血生ぐさいでしょ、がっくりきましたわ、我々は、そしたらかわいそうと思ったのか、奥さんが頭とハラワタをとって綺麗にしたやつをまた吊り直してくれてね、それをナイフで削ぎとって食ったら美味くないのって・・・

M：蒲原先生は、御豊瀬はもちろんよくいらっしやっただと思うんですけど、底曳き船に乗られたことはよくあったんですか？

O: 時には乗られていたみたいですわね。

M: そうですね。岡村先生は学生時代から底曳き船に乗っていたんですか？

O: 私は学生の時からちよいちよい乗りました。当時のことですから、米だけは持って来てくれて言われました。初めて尼岡さんを連れて乗った時のことはよう忘れんですわ。乗るときから御豊瀬に繋いである船が相当揺れてました。僕は現場に着くまでは持ちこたえていたけど、現場に着いたら網入れして「おおい、飯だぞお」って言うから、甲板に上がって行って味噌汁の匂いをかいた途端に船酔いしてしまって、それで、さっき言った野田というのはね、平気でバクバク飯食って、尼岡さんは甲板に出てくるどころじゃない、御豊瀬にいたときから酔ってるから、彼が甲板に出てきたのは入港してからです。だから彼が一番弱くて、僕が真ん中で、野田は最初から最後まで平気でした。

M: いわゆる原付の自転車を使っておられたそうですね。

O: 原付タイプでね、高知のメーカーが作ったものがありました。山崎内燃機関という会社が開発したブルーバードでした。名前は同じけど、日産ブルーバードじゃありません。クラッチパンが独特で、コルクなんです。スポンと入ると弱いから止まってしまうから、ギアの入れ方が難しいんです。

M: 御豊瀬の魚を採集していた時に欲しかった魚を中央市場まで追っかけて行ったことがあるそうですね。

O: ありました。御豊瀬から中央市場に運んで、中央市場で小売に売りさばく、そういう業者もいました。御豊瀬で積み込んでいるのを見ると、「これは」という魚が入っているケースがあるわけです。そうすると、どこへ持って行くか聞いておいて、中央市場へ行くとなったら、中央市場へ自転車で走って戻るわけです。

M: ある時、どうしても欲しくてお二人の片方が売る役、片方が仲買いの役をやったことがあるとか、

O: そうそう。片方が買う役をやって、「岡村さん、あれどうしよう」って言うから、「後ろついてきや」って言って、僕が箱の側まで行った時、尼岡さんが、「お兄ちゃん、これかまわんのか？」「かまわんよ、持って行き、持って行き」と言って、「オオキニ」とか言って、ドウランに入れてね。

M: 高知大の卒論でソコダラの分類学的研究をまとめられて、専攻生として一年残られて、京都大学の大学院に進まれたそうですね？

O: 専攻生になると、教職で一級になる、校長、教頭資格を取れるようになっていました。後にこの制度は取り消しになりましたけど、当時、その一級資格はマスターコースを出ると取れるコースだったんですが、それを専攻生を一年やれば取れたんです。だから僕なんかはその制度が出来たから、申請して、一応入学を認められて、月謝も払って、授業を受けだしたら、旧帝大からクレームがついて、結局一級免許は取り消し。ただ、やっ

ぱり専攻科を出ていけば、それだけ格は上になるから、一応、それを取り方々、京大の水産の勉強もしました。はじめは16科目ぐらいやってました。松原先生が高知大の農学部へ集中講義に来られて、昼休みに会ってやってもええっていうのを、農学部の先生から聞かされました。京大の落合さんなんかと同期の竹田さんという方が、農学部の教官で居ました。竹田さんは自分の京大時代の松原先生の講義ノートを貸してくれましたし、松原先生に取り次いでもくれました。松原先生の所に行って「ソコダラに非常に興味を持っているし、種類も多いので、京大に受かったなら、それを継続して良いでしょうか」そして、「独学で十数科目勉強してます」と言ったら、「4科目だけに集中しなさい」と言われてね。水産学原論とか水産動物学や魚学などの4科目のことです。

M: それは、受験の為にその4つに絞りなさいということですね？

O: そう、4つに絞りなさいと言われました。

M: そうすると、入られた時にはソコダラをやるという事は決まっていたのですかね？

O: そうですね。入れればソコダラを継続しても宜しいという許可を事前にもらっていたわけです。ところが当時、松原先生の講座の助手だった三谷さんに、ソコダラは問題のあるグループだという事でやらせてたんですね。私も後で知って、三谷さんに謝ったんだけど、それから、私が後にソコダラ類についてまとめたFauna Japonicaの図の一部に三谷さんが書いたスケッチを使わせてもらいました。しかし、drawn by Mitaniと書かなければいけないところを、落としてしまった。三谷さんに「一部使わせてもらって、落としてすみません」と言ったら、「いやあ、載っただけでも僕は嬉しい」と言ってくれました。

M: そんなことがあったのですか。

O: 松原先生は三谷さんにソコダラをやめさせて、ブリの漁業生物をやらせたわけです。当時、ブリは資源としても大事だったし、水産学科でもあるから、今度来る理科系の岡村にソコダラを残しておいて、ということだったようです。それで、三谷さんのテーマをブリに変えたみたいです。

M: 岡村先生が、京都へ、その当時、舞鶴ですけれども、舞鶴へ進学された時にどういう方がいらっしたんですか？

O: 教授は松原先生。京大水産学科では第4講座が水産生物学でね、助教授と古参助手は藻類専門、それから、講師が落合さんでもう一人の助手が三谷さん。当時は院生だったが、後に、近大に行った、無足類をやった浅野さんがそのうち技官になりました。

M: 岡村先生が行かれた時に、学生の一番上の方はどなたですか？

O: 一番上は、浅野さんですかね？ 浅野さん、岩井さん、赤崎さん、それから私でしたかね。それで、尼岡さんが来て、私のすぐ下がいなかったですね。あと、宮

崎大に行った山根君とか、岸田君とかが、尼岡さんより2年くらい後ですから。

M：そうすると、岡村先生が大学院の修士の頃というのは、学生はそんなに多くはなかったのですか？

O：多くないですよ。9月の一次試験でパスしたのは私一人でしたから、千葉大なんかからも受けに来てましたけど。翌年1月の二次試験で、直系の人が1人パスして、だから1学年2人しかいなかったんですよ。

M：そうですか。松原先生の所で、論文博士、あるいは国内留学をして学位を取られた方という中に、高木先生とか、片山先生もおられたのでしょうか？

O：片山さんはどうだったのかな？京大で取ってますかね？京大で取ってたら、僕が行くより前でしょう。前かあるいは僕が出た後か。下関の松井さん、石山さんが、私が行く前に講師でおって、私が行った時には下関に出ましたから。

M：そうすると岡村先生が博士課程までの間にいらっしゃった方というのは、2年下の尼岡先生とか、山根さん、岸田さん、その下が中村 泉さんとなるのでしょうか？

O：そうなるかな？そのあたりになると、名簿たどらんと分かんない。

M：重なってはいらないのですか、中村さんとは？

O：学年はずれていただけで舞鶴と一緒にいたわけですよ。

M：吉野さんとは重なってはいらっしゃらない？

O：最後になって私は助手として2年おったでしょ、その間に院生になっていたはずですけどね。

M：そうすると谷口さんも、その前にいらっしゃったんですか？

O：谷口君は、僕が助手になった年に、3回生で舞鶴に来たクラスで、だから初めて僕が受け持ったクラスでした。実験と実習だけでしたけど。

M：田中 克さんも、松原先生のお弟子さんですよな？

O：そうですね。直接には岩井さんに教わった事が多いんじゃないかな？

M：そうですか、浅野さん、岩井さん、その次が荒賀さんですか。

O：荒賀さんは私とすれ違いに修了していました。それから昭和33年が赤崎さん、だから岩井さんの方が先ですね。そうすると、浅野さんと岩井さんが一緒だ、同年ですね。修士修了は、それで赤崎さん、それから次はもう僕になって、僕の次はおらんですもんね。魚類は、それから二年後が尼岡さんと、畦田さん。岸田君と山根君が昭和40年で、私から言うと5年後ですか。それからカジカなんかやった倉若さんと言うのが翌41年。

M：松原先生の学生への指導の仕方というか、接し方というのはどんな感じでしたか？

O：松原先生も、直接、指導というのはあまりなかったですね。セミナーを通じて指導されるという形でした。

赤崎さんとか浅野さんと違って、私と尼岡さんは、全然違う大学から来てるでしょ、だから、私が1人入って、尼岡さんもまた来たわけだから、「高知大から来た奴は！」とよく言われましたね。

けど、私は朝早くね、7時過ぎには研究室に行って、冬なんかだったら、だるまストーブの石炭がらを出して、普通これは女性秘書がやるんだけどね。自分達の部屋のをやるのと一緒に、松原先生の部屋のもカスもとってね、石炭も一回分運んどいて、そうやって朝早く出てもね、夜かなり残らないと、なかなか追いつかない状態でした。朝、皆が出てこないうちに出て、雑用は済ませておいて、もう7時半過ぎには仕事をやっているわけですよ。けれどそれでも夜、どうしても居残らなければいけないし、ところが夜8時過ぎて帰るとね、女性ばっかりの家族の下宿だったから、よく締め出されてね、それで院生だけど、「寮に入ってかまわないかどうか」と聞きました。他の教授は反対したようですが、松原先生は「岡村はもともと学費もろくにないまま来てるし、安いにこしたことはないし、仕事の為でもあるから」と言ってくれました。松原先生の鶴の一声でしょうね、僕以後院生でも寮に入ってかまわないことになりました。そんなら、なお夜遅くまでやりたいでしょ、で、先生に「キー貸してください」って言ったら、「何ー!!」って目むかれましたが、自分のキーをそのまま貸してくださいってね、結局、朝早出して、女性秘書なんかやるべき事を私がやっているのを、薄々知られていたんじゃないですかね。しかし、先生の部屋では煙草を絶対に吸わないことを約束させられました。

M：ソコダラの系統の研究と分類と絡み合って進んで行ったと思うのですが、先ほど、進化に興味をより強く持たれていたという話がありましたけど、そうするとやはり系統の方にどちらかという興味が強かったというわけでしょうか。

O：そうですね。だから、Iwamotoさんなんかと見解がだいぶ違うのは、僕は、形態の変化の流れを見るわけですけど、彼はどちらかと言うと、流れの切れている所に重点を置くわけです。けど、切れているじゃなくて、実はそれには流れがあるんだという点で、見解が違うわけです。どっちかと言ったら、新種の発表とか、種のレベルよりは全体的な流れを見たいなあと思っているわけです。

M：発光器の組織切片を作ったり、組織的な研究をされていたのは、京大に行かれて最初の方なのですか？

O：京大ではね、マスターの2年間は、もっぱら鱗と発光器の形態でした。それで岩井さんとも馬が合うというか、いろいろ話が合うようになって、あそこへ組織学を持ち込んだのは岩井さんだったでしょ。岩井さんは、初めは松原先生の雇われ事務員でした。けど、魚類の研究やりたくって、一度、三重大に入ったでしょ、そういう点が僕とよく似てるんです。二年分の課程を1年でとったりね、それで大学へ帰って来たけれど、肺結核にか

かったりして、その中で、松原先生にかなり助けられながら、肺結核も克服して、それで助手になり、結局は跡を継ぐことになったわけです。僕が行った頃は退院して来たばかりだったかな。一般学生の住む寮とは違う別棟の小部屋にいた寮長みたいな格でね。岩井さんは小部屋に1人住まいで、まだ、寝たり起きたりの感じだったけどね。そしたら、「岡村君、良い物見せてやろうか」って押入れからリンゴ箱出してね、そうすると結核の特効薬のパス、粉末の、あれが一杯詰っててね。病院でくれるパスを飲まずに、肺結核を克服してね、退院して来てるんです。あれにはビックリしました。

M：松原先生のご指導というのは、直接的に学生にあれこれ指導することはなかったと聞いているのですが。

O：蒲原先生とある面では似てましたね。あまり直接的に言わなくて、ただ、セミナー等で、中間発表みたいにやって行くんですよ。セミナーの場では詳しい指導をされてました。

M：学生に対して、批判というか助言をする時に、強い口調で言うことはあまりなかった先生ですか？

O：あんまりないですね。

M：京大と東大のどちらに行くか迷われたことがあったそうですね。

O：私は蒲原先生の弟子で、蒲原先生と富山先生は田中先生の兄弟弟子です。それで、はじめ東大に推薦されて、富山先生もOKされてたんですよ。だから理学だから、行けばそのままストレートで入れたんだと思うんだけどね。ところが、東大に行ったら結局、富山先生がいる油壺に行かなければならないわけですよ。しかも、富山先生と毎日一緒にやれるわけでもないし、それから学生が1人でしょ。当時は、実は、蒲原先生が東京出張から帰って来てね、研究室の窓の下を通りながら、フツと見上げたら私と顔が合って、そうしたら「おい、富山君に頼んで来たからな」と言われて、僕弱ってしまっただけね。

京大の方は、ちょうど松原先生が魚類の「形態と検索」を出されたときでした。あれに非常に感銘を受けました。当時のお金で5000円~6000円だったかな、高いですよ。3ヶ月は我々が生活出来るぐらい。蒲原先生が買われたやつで、自分なりのノートを作ってね、横にずっと見れば魚類全体の変化の方向がパッと分かるものを作りました。

それで、結局、若い頃田中茂穂先生にうとまれた松原先生が文献融通などちょっとした思も受け、引け目もあった蒲原先生の所から私が行く格好になったわけです。職員が松原、落合、三谷と3人おるわけですよ。それから、院生に岩井、浅野、赤崎、そうすると6人、相当なスタッフがいるわけですよ。そうすると、富山先生1人の東大と日常的な耳学問から何から全然違うんじゃないかと思いました。だから1年余計にかかっても、京大の方へ行きたいということになったわけです。

松原先生から良く聞かれたのは「岡村、蒲原さんの所

とわしの所とどちらが文献が多い」とか「標本はどっちが多いか？」ということですよ。「そりゃ京大の方がもちろん多いですよ」って言ったら「そうかあ」と言ってニコリしててね。で、また何週間かしたら、「どっちが多いか」って、聞くんですね。

僕が京大に残る時、浅野さんを近大へ出されたでしょう。浅野さんは、いきなり技官から助教授になったわけですから、これはかなり昇任になるわけです。ところが僕があるとき先生の部屋へ入っていったら、落合さんと岩井さん2人を呼んでいてね、どうも僕を浅野さんの後へ採用する話しをしていたみたいでね。松原先生は2人に「技官の初任給はなんぼや？」と聞いたんですよ。よう忘れんけどね。2人が僕の前で「1万5千円です」と答えたんですよ。ところが助手は2万3千5百円、8千5百円も違うんですよ。「よし、そしたら岡村の為に助手でも取ってこようか」って、そしてやっぱり、いろんな都合もあって助手ポストより技官職の方が今のところ欲しいという講座があるわけですよ。そうすると技官職と助手ポストの振り替えと言う可能性があって、3人目の助手ですよ。そんなポストありやしません。だから結局あの、助手ポストをすっぱり取って来てくださってね。それで僕が助手で残ったんだけど、僕の結婚の事まで心配してくれて、岩井さんに「なんぼあったら2人やっていけるんだ」って、岩井さんが「まあ3万円あればいいですが、2万7~8千円でも何とかあります」って言ったら「2万3千5百円やったなら、1年もしたら嫁ももらえるか」と言っただけね。だからあの辺りもね、何かこう頭の隅に、昔世話になった蒲原さんの弟子やし、それを初めて引き受けたと言うのとね、それから一方で僕との直接のやり取りとかね。その中で何か僕をこうしっかりと、どっかで捕らまえていてくれたなあという感じがあるけどね。

M：なるほど

O：松原先生が亡くなった後、高知大の私の旧官舎へ奥さんが直接、舞鶴から息子さんと娘さんを連れてこられたんですよ。松原先生が残された書籍についての相談でした。当時、日本の魚類学界で初めて、蒲原先生から岡村へと、初代から次へと、高知大で文献の引継ぎが成功していたんですよ。それと、僕という人物の事をどうも松原先生は晩酌なんかやりながら奥さんにいろいろと話されていたんじゃないかなあ。それで私をある面では頼りにされたのかもしれませんが、それで僕も蒲原先生の文献を引き継いだ時のことを率直にお話ししました。「松原先生がね、この本はね10万円超えるとか言われているけど、実はそうじゃないんですよ。先生が言われたのは売値でね、場合によっては10分の1以下くらいと思わなきゃいけませんよ」と言いました。蒲原先生のは、全部でたった20万円だったもんね。最初につけられた値段が、それで、一方でリスト作ると同時に、ある古書店に再評価を依頼したら、50万円の評価書を書いてくれました。けれど、松原先生はね、当時500万円とか800万円とかそんな大きい額を奥さんに言っていて、それで文

献について京大と話しが進んでいなかったんじゃないでしょうか。宙に浮いた格好になって、それで私の家に来られたようです。僕も率直に意見を言って、それで結局は買い上げになったようです。

M：高知大に、岡村先生は助手として着任されたそうですね？

O：うん、一応、京大で講師に昇任という話が出たんです。けれど、高知大には助手ポストしかなかったんです。例えば、私学の場合だとね、国立大へ降格転勤というのが有り得るんです。実際に東海大の講師からね、高知大に助手で来た、あるいは助教授から助手で来たという例がありました。僕の場合、京大で昇任してしまうと、こっちにポストがないわけですよ。それもあってね、岩井さん、落合さんが、呼ばれているところで、岡村も転勤するんだったら、昇任転勤の形をとってやりたいという話をされていてね、まあそれが普通一般常識やったんですよね。けど、昇格してしまったら転勤出来なくなるから、僕は助手のまま結構ですし、今の所、講師のポストはないとお話したんです。そして、長い目で見れば講師や助教授に上がれる余地はあると思いますからと言ったので、これも怒られてね、京大講師を蹴って、新制大学の助手で良いと言うんだから、僕は送別会やしてもらえなかった。松原先生の怒りが解けるのに、何ヶ月もかかって、いっぺん怒らせたら大変でした。

M：高知へ助手で着任されて、2年後に助教授になられてますよね。

O：ええ

M：蒲原先生の後をついで、高知大で魚類学を担当されるようになって、着任された当時は、どういうことをしようという風に思っておられたのですか？

O：いや、それはもうほら、あの学位論文仕上げてなかったから、それが第一でした。原稿で言ったら、タイプライター用紙で10枚か20枚書けば終わりという段階でした。それで、学位論文を完成のつもりで着任したところ、蒲原先生が、退職と同時に即、文献を寄贈するから、取りに来いというわけです。それで引き取って来た物を、買い上げという形になったから、リストを作らなきゃいかんのですよ。そのリストを作るのにね、人件費が20万くらいかかるんです。当時僕の研究予算が、年額40~50万でした。けど、しょうがないから、女の子雇い上げて、リストこしらえてね。そのために1年半くらいかかったかな。それから一方で、3階の標本室も作らなければいかんあって。そうすると、自分の研究ストップして、標本室を鉄骨式にしたからその経費を出して、それから当時、一般生物学の実験用の顕微鏡がだいぶ台数不足だったんです。だから、どうせ自分の直接の研究が出来ないのなら、もう学科の為に、一般生物学実験用の顕微鏡はこっちが買おうと思って、あとで皆さん返してくれましたけど、学科が潤沢になって来た時に、

だから、始めの3年ぐらいは、文献引継ぎと、標本の

再整理に追われてました。そして、学位論文を提出しようとしたら、松原先生が病気で倒れられてね、病院へお見舞いに行きました。枕元のベッドの向かい側に畳が1畳敷いてあって、座って話そうとしてね、畳の方に移られたらね、肩で息されておられるんですね。僕は岩井さんにも話して、先生の研究室のテーブルに学位論文を置いとくのが良いだろうと思って、そうしました。すると引き上げる時に、松原先生が「あの論文持ってきたんだらう？」と言われるから、「いや、お元気になって回復されたら見ていただくように研究室のテーブルに置いてあります」と話しました。後で岩井さんが病院に行ったら、「岡村の論文はどうしたらう」と聞かれて、岩井さんが「いや本当に回復したら再度持ってくるって言って高知に持ち帰りました」と言ったんだそうです。そしたら、「うーん」とって一声唸られとったんだって。それでそのまま亡くなりました。

次の教授が決まるまでかなり揉めたんです。植物の人が退職間近やったから、その人を教授にするか、助手の岩井さんが一足飛びに教授になるかどうかね。そしたら大学紛争が絡みました。3人の教授からも、紛争を起こした院生達からも岩井さんは教授に推薦されたんですよ。だけどそこに落ち着くまでには、長引いて学位審査もストップしました。岩井さんが教授に就任してすぐに、論文を持ってくるようにと伝えてくれたんです。当時、学位審査を受ける時に他の人たちは副論文をだいぶ出しよったんですよ。それで岩井さんに「副論文でFauna Japonicaでもつけましようか」と言ったら「いやあ、あんたは学位論文一発で良い」とか言ってね、あとは口頭説明だけで良いて、

M：確かに経歴拝見すると高知大に65年に着任されて、ソコダラ類のFauna Japonica出版が70年ですから、その間に大学紛争が起こっています。ちょうど大学が荒れている時ですね。

O：荒れている時で、しかも僕、京大から移ったでしょ。京大は教職員も荒れて、学生だけやなしにバリケード挟んで衝突してたんです。高知大学にも昭和44年に火がついたんです。教育棟の封鎖や本部の封鎖が起きたりね。僕なんかは、自分の研究というよりは研究の引継ぎですか、それと一方では紛争を治めながら大学作りですよ、組織作り。これに割かれた時間が非常に大きかったですね。例えば、僕は昔の生物学科4名の教官の中の1人として来て、結局文理理学部を人文学部と理学部へ改組していかなきゃあかんし。生物系4名を正規の学科として4講座12名+一般教育2名+修士課程に大拡張せにゃあかんし。

M：高知に来られてから随分川に力を入れてこられましたよね。

O：いや、入れてる、というより、これはどちらかと言うと地元要請が強かったのと、それから蒲原先生が淡水魚をあまりやらなかったからですね。僕が帰ってきた頃から昭和30年代・40年代にかけての高度経済成長の

ひずみが出始めて、川の汚染がだいたい問題になり始めてました。一方、僕自身は系統的な流れ、あるいは分類を見る場合でも形態形質だけやなしに生態形質も見たいという考えもあったわけです。例えばソコダラなんかだと、生態を念頭におかないと、かなり理解しにくい点もあるわけです。そういうところに持ってきて、学生の中にも淡水魚の生態をやりたいという希望者も増えつつあったんです。だから、始めのうちは学生をその要望に出来るだけ沿わせてやりたいということで河川の魚類の生態を研究したわけです。始めのうちは研究費の持ち出し、場合によってはポケットマネーの持ち出しになるけど、始めはきれいだっただ鏡川を主体にして研究を行いました。そうしているうちに経済成長のひずみで、川の汚染などが問題になってきました。例えば高知県の方では、鏡川を調べてほしいとか、四万十川調べてほしいとか、調査費も付いた形で依頼も来るようになりました。結局これは地元要請と学生の要望を併せて費用持ち出しでやっているうちに、経済成長のひずみに端を発する河川水域の見直しですね。これが強まってきたんです。さっき言ったように川筋育ちで、海でも育ったけど、親父の転勤が多くてあの仁淀川沿いで育って、それから疎開した先が四万十川沿いでしょ。それから途中須崎（高知県須崎市）という海辺にも居たしそれから新居浜（愛媛県新居浜市）もあって海辺の町ですね。だから海だけでなしに川育ちであったというのも、だいたい物言ったでしょうね。

M：こたか丸（水産研究所調査船）で随分丹念に調査と採集を続けてこられたんですね。

O：結局、種の査定ってことも集計の方も正確を期したいですからね。それからあの浅いところはね、小手繰船、まあ3~4トンかあれ？

E：そうですね。

O：大体水深100メートルぐらいまでの間か、それからもうちょい深い所は沖合い底曳き船（40~60トン）で見れるわけでしょう。

M：大手繰という。

O：ええ、で、これは時には県がチャーターすると普通の操業は300メートル位までですけど、400~600メートルを新漁場開拓目的で調査をやりますから、で、更に沖合いの調査のために淡青丸や白鳳丸を持ってきたこともあります。そうすると水深がずっとつないでいけるでしょう。まあだから、そういう意味でちょうど中間役を果たしてくれたのはこたか丸ですね。

E：魚類学会と岡村先生の関わりをお聞かせ下さい。

O：それはもうやっぱり地域のメンバーの1人として、魚類学会が発展するにこした事はないし、だから中央の上野輝弥さん達が動いてくれたのが大きかったけれど、今の学会組織に改めるときには大いに賛同しました。それから石山礼藏さんなんかも強く言われてた、僕なんかも賛成だったけど、やっぱり若い人に意欲を植え付ける為に、学会賞みたいなものがあると良いという意見であったんです。というのがFauna Japonicaを書いた時にね、

岡田弥一郎先生から言われたことが記憶に残っているんです。

さっき言った紛争があったので、僕は全学の役員だし、デモがあると市民に迷惑をかけたらいけないから一緒に出ました。それから警察の私服なんか見つけると学生が殴る可能性もあるしね。そうすると身をもってバツと割って入ってね。怪我させたら負けやから、それで結局紛争が12月まで続いたんです。

それでFauna Japonicaはその前年から書くように指定されとったけど書く暇なくてね、役務を開放された1月1日から書き出したのです。梅沢先生やら恩師にも「講義の時以外は出て来れませんから」って言ってね。家に顕微鏡と標本持ち帰ってね、それでもう必死の想いで書きました。3月までに仕上げなきゃいけないのに4月いっぱいしかかってね。で、岡田弥一郎先生も4月いっぱい何とかならなければ、5月から6月にかけて検査があるかもしれないけど、4月に完成させれば大丈夫だと言われました。わずか4ヶ月で書いたんですよ。そのかわり死にものぐるいでしたけどね。書き始めの頃には、もう娘が生まれとって、娘が泣き出すと女房がねんねこで包んで背負って出て、こっちも気になってちらっとみると、雪がちらちら降ってるんですよ。だから本当は自分の心の中では最後にthe last but many heartfelt thanksというのを女房に書きたかったけれど、あの頃の日本人としては、ちょっと恥ずかしくて。

あの頃は今のパソコン、コンピューター式になるちょっと前でしょ。追加なんかがあると切り貼りして順送りやるんです。気が付いている人はほとんどいないけど、1行切り貼りして脱落しているところがあるんです。それからあのNezumiaネズミダラ属を当時はみんな抹殺していたんです。けど、これは生かすべきだということでNezumiaを生かした時に種小名の語尾を変えなきゃいけなかったのを気が付かなかつたら、Hubbsが懇切丁寧に2ページに渡ってコメントをくれました。1ページ目はベタ褒めですよ。ところが2ページ目に、「ここはこう語尾変換すべきだった」と書いてあって、これはやられたなと思ってね。そういう不備があったんで、「せっかく推薦してもらったのにちょっと恥ずかしい結果になりました。もうちょっと時間がほしかった」と岡田弥一郎先生に書いたんですよ。そしたらね、「物事は100%完璧というのはありえないので、まとめられる段階でまとめられる所までやるべきであって、今回はもうそれが精一杯であったし、私が見る限りでは上々の結果です。日本生物地理学会と日本魚類学会から2つの学会賞をもらったと思ってください」とその時はっきり書かれているんですよ。実際にFauna Japonicaを書かれている方を見ると、数学物理なんかのシリーズも出てますからね、あのシリーズは、大抵もう60歳前後になって退官直前の人たちが、何かの学会の推薦を受けて書かれているんです。落合さんがあれを50歳にならずで書かれていますし、僕は35歳で書きました。35歳のFauna Japonicaは、なかったんですよ。

そして岡田先生が多分、そのことを含めて、「2つの学会賞をもらったと思ってください」と言って下さったんだと思います。やっぱり若い人をやる気にさせる意味とか、奨励する意味では、何らかの形の賞があってもいいんじゃないかなという事を僕は前から思ってたんです。そして、学会賞を設けるようになった時の評議員会でも僕は絶対やるべきであるし、旅費をつけるべきだと言ったんです。

M:今はようやく旅費を出せるようになりましたし、

副賞も一応できるようになりました。今日はどうもありがとうございました。

(松浦啓一 Keiichi Matsuura: 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館標本資料センター e-mail: mastuura@kahaku.go.jp; 遠藤 広光 Hiromistu Endo: 〒780-8520 高知市曙町2-5-1 高知大学理学部海洋生物学研究室 e-mail: endoh@kochi-u.ac.jp)

会記・Proceedings

魚類学雑誌
55(1): 73-74

2007年度第4回幹事会

日 時: 2007年11月27日 13:05-17:30

場 所: 京都大学フィールド科学教育研究センター

出席者: 松浦・西田・奥田・甲斐・竹垣・波戸岡・北川・
藪本(次期会計幹事)・須田(次期会計幹事)

1. 会務報告: 2007年度科研費「研究成果公开发表(B)」に、市民公開講座「人と田んぼと魚たち—農と自然の共生」が申請された。科研費「学術定期刊行物」は、今年度から義務づけられた出版社の競争入札と採択後の監査への対応策が不十分であることから申請を見送った。今後は、採択された他学会の動向を見ながら申請を検討するが、基本的には科研費に頼らない学会運営を目指す方針であることが確認された。
2. 編集報告: 2008年度から編集委員長に篠原現人氏、英文誌主任編集委員に渡辺勝敏氏の着任が報告された。2008年度から英文誌に限りOnline Firstサービスが始まり、これに伴う雑誌体裁の変更等が報告された。英文誌の電子投稿査読システムの2009年度以降の導入が検討されていることが報告された。
3. 会計報告: 2007年度より一般会計の支出項目に「選挙関連費」を新設し、2008年度から非選挙年に「選挙関連積立金」を計上することとなった。和文誌の広告掲載に加えて、今後は学会HP上でのWeb広告について検討することとなった。科研費「研究成果公开发表」についても2008年度から特別会計として試算表・収支決算表を作成し、年2回の監査を実施することとなった(監査は2007年度採択分も実施)。年会事務局の会計業務引き継ぎの円滑化と会計の明瞭化をはかるため年会要項と収支報告書の雛型を作成することとなった。シンポジウムの援助額や配分方法について議論された。年会の旅費援助事業に関するアンケート結果とオークションの売り上げが報告され、今後の援助事業の在り方が議論された。
4. 年会報告: 電子情報委員会と年会事務局から2007年度の年

会開催に関する問題点が指摘され、12月21日に国際文献とともに年会反省会が開催されることとなった。

5. 男女共同参画: 第1回男女共同参画作業部会の開催報告があった。来年度、男女共同参画学協連絡会に正式加盟するに当たり、本会の男女共同参画委員会の設立準備を開始することが確認された。また、年会時に懇談会あるいはシンポジウムの開催が予定され、託児支援の方針が決定された。学会活動における問題抽出のためのアンケート調査が実施されることとなった。委員候補1名の辞退表明と今後の活動拡大に対応するため、委員候補を増員することとなった。
6. 電子情報委員会からの提案: 学会のプライバシーポリシーを制定することとなった。幹事会との連携を強化する一貫として、事務局と合同で年1回開催される幹事会に電子情報委員長に参加してもらうこととなった。電子情報委員の引き継ぎに関して意見が交わされた。
7. 学会の国際化について: 海外会員からの要望で2008年度から英語の年会プログラムを作成しHP上で公開することとなった。海外からのオンライン入会に対応するために、会則・細則を一部英文化することとなった。
8. その他: 学会運営の経費削減案として、和文誌の完全オンライン化(Web出版化)の検討を開始することとなった。中国評議員の次期評議員辞退申し出が了承された。

2008年度第1回幹事会

日 時: 2008年1月18日(金) 13:10-17:40

場 所: 九州大学農学部

出席者: 西田・後藤・望岡・高橋・竹垣・須田・藪本・篠原(編集委員長)

議題

1. 会務報告: 会員数推移が報告された。今年度の行事予定が確認された。今年度の学会賞への応募がまだ無いことが報告され、個人会員と評議員に応募と推薦をそれぞれ促すアナウンスをすることとなった。